

1919年米国ボストンでのロード・ダンセイニ卿の講演に聞き惚れている者がいた。その一人はラヴクラフトであったことは知られている。そしてもう一人そこに詩人がいた……

■文学者になろうとしなかった文学者

我々がダンセイニ卿について最大の知っていることは、作品があまりにも素晴らしすぎて《現実の文学の王》にはなり得なかったという華麗で貴重なデーターだ。

ラヴクラフトや稲垣足穂をはじめとして影響されたことを公言する者から、卿のことにはいっさいふれていないのに本棚の一番大切なところに並べているといったJGバラードのような例まである。その多くは幻想文学者と俗に称される作家たちの拍手だ。ボルヘスからのラブコールも知られているところだ。

しかし「パプルクンド」が到達できるようでいて永遠に到達できないようにダンセイニ卿も世界各国語に翻訳されたところで、それですべて解明されたとはいえない。

「貴族遊び」や「旦那芸」として低く評価され、文学賞を授与されなかったかわりにおよそ百年ものあいだ好奇心な世間の追求を逃れ、風化もせず異相を誇り光を保持してきた《天体粒子》がある。

他の誰とも違ってそこには《見えないファイアーウォール》が立ちはだかっているかのようだ。このパスワードを看破しない限りダンセイニの統合的人格は姿を現さない。

その基本の第一は、ダンセイニは決して文学者になろうとしたわけではなかったということである。

経済品としての文学からは遠く、人間的基準の文学よりも高く。この確信犯的意志が卿の全生涯を黄昏のバリアーで包んでいる。

名品「ペガーナ」の発明といえども作品はその変遷の一過程に過ぎず、ダンセイニは《あふれきておそいくる言いようのない高貴ななにか》であり、《人の世の歌にも詩にも類例を見ない未だ辿り着きし者はいぬ宇宙》との正当な直接リンクを望み、要求し掴み取ろうと試みたのである。

● まだ人間が達したことの無い水準で綴られた詩、どんな商人もあえてネダンをつけよう
としない叙情詩(三人の文士に降りかかった有り得べき冒険)

● 人の世の詩にも歌にも、ついで聞かぬ(カルカソヌ)

● 自分にとって魅力的な話とは……見捨てられた神々をめぐる話題(流浪者クラブ)

■想像力は決して枯渇しない

締め切りによって「文学」が生産されることはない。想像力は決して死なない。想像力

は宇宙に気がつけば気がつくほど潤沢になる。想像力に年齢は関係しない。想像力に関係するのは、宇宙との関係性の深度である。

《枯渇と呼ばれる場合》はほとんど錯覚か理解不足である。

① 感覚を重要視しすぎて基準に満たないケース

(成功が若すぎるロックミュージックや漫画のような場合)

② すでに本人の関心が別のモノへと転換しているケース

③ 外野が見誤っているケース(ことに晩年を)

探求がヒトの一生では終わらないことを知っている真の芸術家は、常に締め切りを持たない。

芭蕉はあてなき旅をするごとに想像力は豊作になっていったし、通常失敗を重ねることにアイデアは増えていく。

想像力は商品ではないし、すべてを商品化できるモノでもない。

想像力のない者たちによって想像力は人間の側に都合よく解釈され、狭く低くしかも安く見積もられるせい、上手なお手本を見ることは少なかった。原稿用紙を前にした結果捕縛されるモノではなく、おそらくは世界認識の量に応じた代謝行為として付与される想像力は、ダンセイニにとっては当然のことながら必要不可欠の食料だった。

● 想像力には、人間のその他の必需品と同様、食料が必要なのである。(自伝)

● 私は靈感に敬意を表して、その作品を取りやめにくくすることにしたのだ。私はしばしば靈感の到来を長い時間をかけて待たねばならなかった。(自伝)

● 私は何年もの間激励なしで仕事を続けてきたのであり、仕事を進める上で激励など必要としなくなっていたのである。(自伝)

■人間至上主義ではなかった文学

予想していた以上に自伝では「霊的」という表現が多いことに驚かされる。あたかも霊的OSの端末のヒトツとして「文学作品群」が用意されていたようだ。

ダンセイニ卿が特別なのか。いや、そうではあるまい。我々がすでに特別な存在になっているのだ。宇宙においては。

煙をはく蒸気機関車や工場がなくなっても、風を閉ざす高層ビルに住み、見ただけで感染するコンピュータウィルスをうみだしている我々の時代の方が。

● 登場人物がすべて人間である作品を書き上げたのである。(自伝)

● その作品には人間は登場しない。その作品の登場者はハリケーンと地震なのである。

(自伝)

● 私の経験の彼方にある不思議な源泉からやってきた作品(自伝)

● 言葉の靈感で描こうと(自伝)

● 私が知ることができない場所から突然に、そして強烈に訪れた何物かが存在している。それは私には靈感のように思えるのだ。その靈感のお陰で私は自分の作品に深い敬意

を払うこととなるのだ。(自伝)

■ 見ることの冒険

自伝の翻訳者の稲垣博さんからのご指摘によれば、卿は「靈感インスピレーション」単体の言葉づかいよりも seemed like inspiration という言い回しを好んだそう。

See は look ではない。現象を見るわけではない。心に浮かべてみるのだ。

それは現象の背後。

夕暮れの向こう側。

● 霧があたりの景色を目から隠すと心のなかで夢が目覚め(ケンタウロスの花嫁)

● 眺めは、わたしにとって、名手の技がヴァイオリンから引き出した和音と等しいものだった。すなわち、人間の臆病な靈魂を天国や妖精郷まで運んでいくものである。(ヤン川を下る長閑な日々)

● お前の美は、空の美は、石楠花の花の美は、そして春の美は、人類の心の中にしか生きていない。(都市の王)

■ 妖精の住んでいる場所

2004年春、我々の住んでいる宇宙の最新の情報がNASAから報告された。

宇宙の75パーセントはダークエネルギーが占め、21パーセントはダークマター(暗黒物質)。

星や銀河はわずか4パーセントに過ぎないことがわかったのである。

つまり宇宙のほとんどが「見えない物質」で占められていることが、科学的側面からも言及されている。

見える物質のみからなる世界記述は、いまだパートタイムとも言える現代科学の記述から眺めても、不完全きわまりないということだ。

見えにくいものは我々が見ていないだけのこと。見えなかったり見えにくかったりしたものの方にこそ、真実味はある。

妖精の側に落ち度はなかった。

● それは暗闇と星々の中へと伸びているのであったが、道の先にはありふれた野原と庭があった。(黄昏の光のなかで)

● レリス川は永遠の中から歌いながら出てきて、道が終わるところにあるこの村にほんのしばらく滞在して、また永遠の中へと去っていく。(都市の王)

■ 記録する者

宇宙を「歌」にたとえる者たちは、古来より多数いて、名づけられている者たちだけでも「神官」、「占い師」、「詩人」、「幾何学者」、「航海者」、「羊飼ひ」。

さまざまな人種と職業の者たちがいて、中には呼び名は不確かだが、さらにこの中には

これらの職業がまだ断ち分かれていなかったころのすべての職業的性格を内包する者たちもいたはずである。

文学者は文学を書くのではなく宇宙の不確かな確実さを文字にこめ、或いは科学者は科学論文を書くのでも望遠鏡を眺めて宇宙を観測するのでもなく、不可視の宇宙の実在をその時々最良と思われる方法で模型化しようとしてきた。

記録する方法は文学だけでなく他に幾通りもあった。

● 天が考えていることはすべて、沼地の考えていることでもある。(妖精族の娘)

● すると川がいった。美と歌は人類よりも気高い。(都市の王)

● 意味のないものに意味が宿り、……地球が溜息を漏らし、夜が目覚める、そんな刻限だった。(カルカソヌ)

● 宇宙の空隙の架け橋たる者(自伝)

■ 複数の名前

人間を職業で分類するようになって以来、学問は細分化され専門化するようになった。

それからというものクライアントや読者はネームバリューという質量の大きさのみで判断されるようになって、肝心かなめの真の読者も真のクライアントの存在も時代遅れのマーケティングにされて顧みられなくなっていった。

まず全体を眺めわたす統合者が激変し、戦闘的で利己的な専門家が各分野で幅をきかすようになった。

人が二つ以上の肩書きを持つ場合、二つ目からは「趣味」と断定され、やはり呼び名はあくまでもヒトツに限定されるのだった。

我々の社会は複数の名前を持つことを禁じている。

二つの名と二つの仕事を持つモノは「孤高者」として隔離される運命にあった。

文学者は「文学者」であって科学者はいつまでもまぎれなく「科学者」で《科学者で詩人》であるということはほとんど許されなかった。ましてや《科学者で詩人で建築家》でというようなことは詩人と建築家であることは遊びか水準以下であることを常にプラスアルファされ続けた。

或いは「夢想家」という決定的な不適格者の烙印が押されるのだった。

ダンセイニ卿は宇宙がクライアントであり、星々を読者に選んだ。これは単なる飾り言葉でなくて真のことなのだった。

イエイツのいる文壇ではなく、賢明にも「時」を読者に選定した。ヒトの集団では理解が遅れてやってくる事情も知り抜いていた。

そして我々がしっかり記憶するべきこととして、彼らのペンはえてして未知の物質

Unknownからできているので、何十年か先でないと本は出版されていようがそのとき絶版となっていくようが、たとえ再び発掘されたとしても特異性のみが強調されすぎて、物語全体がくつきりと浮かんでこないということである。

●（〈名声〉は詩人にこういった）百年のうちには、あなたにお目にかかりましょう。それもあなたの家の裏手にある、墓地のなかだね。（約束・五十一話集より荒俣宏編）

■同一編集者

2001年宇宙の旅で知られるSF作家アーサー・C・クラークは、重力を嗅ぎわける犬のような編集者だったといえる。

ダンセイニ卿とは晩年まで書簡を交わし続けている。現代科学の方へ近づくように誘いの言葉をかけていた。〈神秘〉を〈科学の力〉で管理しようとする挑発もあるかのようなていねいな手紙だった。

―最も才気溢れる想像力ですらも宇宙飛行士達が持ち帰るすべてのものを想像することには二の足を踏むことでしょう。貴殿の夢の中の民族や国々も、これからの数世紀の間に人類が邂逅する世界（※宇宙飛行時代のこと）に比べれば、その不思議さでは太刀打ちできないであります（ダンセイニ・クラーク書簡集）

そしてクラークらしいのは、他の有力者にも声をかけていたことだった。

クラークが視線を投げかけた先は、物理学界一の自由な精神だった。

クラークをBとすればクラークを仲介してちょうどAとCは、出逢った。

Cもまた夢想家と見なされていた。しかも本人自体モルモットBを自称して生涯の思考データと想像力を地球という祭壇に無償で捧げていた。

2004年夏、アメリカで切手になったその男はバックミンスター・フラーとして知られている。

■妖精と重力

妖精は重力によって捕らえることはできない。

重力は世界に沈む生活者を捕まえてはなさない。

感覚は重力の捕縛をまぬがれることはできない。

感覚は足元にとらわれているからだ。

感覚はまだ視ることができるからだ。

妖精は分析できない。

妖精は文学者に独占できない。

なぜならば妖精は複数だから。

捕らえようとしても捕らえられない。

重力からそしてペンから自由なのだから。

そして大事なことは《変換できる》ということだ。

重力がまったく新しい建物ドームになるように

妖精は姿を変えて遷りゆく。

妖精はへなにか泣きたくなる美しいもの（※放浪者クラブ）や

へしだいに薄れゆく長い暑い夏の黄昏」(※同上)へ変貌したり

〈四つの方角から吹く風のそれぞれの名前や、夜明けの鳥の歌の意味までわかる者〉

(※妖精族のむすめ)と同意語変換されている。

宇宙とは同意語検索の旅と発見に他ならないことを、ダンセイニは認識していた。

妖精を観察し共鳴する者もまたいつか妖精となる。

妖精は気まぐれにしか現れない。

妖精は出版社の意向とはまるっきり別の期限をもって現れる。

それゆえ妖精を描こうと願う者は全生涯を通じて社会の重力からも浮き上がり漂い続ける者となるのだろう。

それが憂き世の不確定存在者、不安定逗留者である妖精＝浮世者の宿命である。

- 年や世紀といったものは、かれに何のかかわりもなかった。それよりもずっと大きい時という大波が、かれの相手だ。(カロン・五十一話集より荒俣宏訳)

■ パーティのデザイン

良いとか悪いとか結論の善し悪しでなく結果的に成功したか失敗したかという評価でもなく、もし仮に《自然》にコンセプトがあつてそのコンセプトを積極的に理解しようするものがあるとしたら、おそらく自然は喜んでそのものに手をさしのべることは間違いないだろう。そのプランナー、そのデザイナー、そのドライバー、そのビジョンを夢見る者たちを呼ぶ名前があるとすれば、それこそ死語となりつつある「貴族」という言葉がふさわしいだろう。

社会階級的な意味での貴族は嫌っていても、生まれつきの貴族性は決して否定することがなかった。我々の世話をする召使いの数は思っている以上に多く、当人が気づいていないだけのことだった。

そしてダンセイニ卿はなによりも最後の人類としての矜持をもって闘った。

あらゆるすべての移ろいゆくはかなくかぼそきものを、なにもかも現実には縛りつけ標本に分析したり、私有地にして鉄線を張り巡らせるものどもと。

我々は実証できなくても、直観的に知っている。卿のパーティにはついぞふつうの人間は招かれたことがなかった。〈天地のあらゆる色彩が、太陽との名残を惜しんで繰り広げた〉(※ヤン川を下る長閑な日々)精霊の宴であった。彼方からの亡命者であり真の貴族にふさわしい常にフリーウェアのパーティだった。

- つい昨日まで人間と呼ばれていたその小さな影が、こうささやいた。

「わたしで最後です」(カロン・五十一話集より荒俣宏訳)

- あまりにも長く野を略奪した者たちにことごとく死を(九死に一生)

■ ファンタジーのセキュリティシステム

ファンタジーは逃避の文学ではない。

科学者には未だ見えないものを見て、詩人には伝えられないことを歌い、予言者や神秘家の呼びさまそうとしたものをさらに新鮮さをともなった《驚異》で呼びだした。

さらに物質たちの声にならない声を言葉にしようと試みた。

その結果はどうであったのか。

魔法の円の外にいる人にはほとんど無名であった。(※ナス氏とノール族の知恵比べより)そして執筆開始から百年がたとうとする時(※ペガーナの神々1905年出版化)、ようやくファンタジーの棚に入れられるようになってきた。

それでもまだ世間では逃避の文学に分類されている。

科学者が星の果てまでを見渡せると思い、職業詩人が綴る詩が太古の詩人を凌駕する詩と感じ、インスタントコーヒーを飲みながら予言者や神秘家をテレビに眺める世界では、結果を生み出さないもの、カタチにならないもの、コインを生み出さないものは、ほとんど『夢』という共通イメージで断罪され廃棄処分された。しかたなく認知されても「逃避」という退行ラベルが貼られることが多かった。

大多数を占める文学の場合、特にこの電話が引かれ自動車が街の主人公になった数百年というものは《人のランク》が上がったと思いこみ、「現象依存症」にかかり「有名病」や「性急病」とかの症状を連発し、実は文学においては最重要課題である《現実》というモデリングが示されていなかった。経営者や労働者と同様に「社会」という奇妙な幻想に汚染されてきた。

ダンセイニ卿はこの世の誰もが認める文学であるよりも、この世の誰もが認める文学者の誰よりも、あの誰もが困難すぎて表現し評価するのをためらい、ほどよく無視することが社会職業的名士の身だしなみとされた「ダークマター(宇宙の九割を支配する暗黒物質)」から生活や多忙を理由に逃避したのではないことは明らかである。

ファンタジーという様式があるならば、それは妖精や一角獣が派手に演技するものではなく、別の天体への移動でもなく、定番化され陳腐化し固定化された夢にすべてを託すのでもなく、身近な沼や丘や夕暮れに《ひそむもの》で、あくまでも宇宙的聖性の探求を目的としたヒトツの文学形式の可能性である。

《夢》から現世的ウイルス要素のいっさいを抜き払い、《夢》の原初的設定を再生回復しようとした。

ダンセイニ卿にとって、夢は通常の主観ではなかった。

《メタフィジカル》、すなわち超物質世界を《夢》と総称した。

そしてダンセイニ卿にとっては、さまざまな言い方があるとしても、《メタフィジカル》の言語化こそが《文学》であった。

いつか科学が本当の科学となった時みつけるだろう星々の彼方と此方をつなぐ法則や、神話の時代の天語部が歌った歌の響きや、幾多の神秘家や予言者がおぼろげに感じたビジョンをダンセイニ卿の物語はすでに予告している。

現実という鎖で宇宙を矮小化しシェアウェアの「私」やバグだらけの「自然」を持ち込み、そのあげく表層的となり退化化してしまったのは、我々多数の文学であり、我々一般の現実の方だったのである。

●魂を持ち美しいものを探し求めてもそれが得られぬままならば、寂しい沼地にいる野に棲むものでいたほうが幸せだという結論に達した。(妖精族の娘)

●詩人にうたえるようなものでもなかったし、黄昏に意味がわかるようなものでもなかった。(ケンタウロスの花嫁)

●多くの疫病とは異なり東からでなく西からやってくる性急病(都市の王)

●夢は人の心の支配権を奪いとり、夜を徹して地獄の焼け野原をひきずりまわすのであった。(サクノスを除いては破るあたわざる堅岩)

●価格に関しては商品たちの声にならない願いが考慮に入れられたもの(トーマス・シャップ氏の戴冠式)

●その呼び声は遥か時空の彼方から響いてくる。(野原)

■主語コレクション

ダンセイニ卿のつむぎだした物語の主語を記載してみよう。

1 歴史よりも古き森(サクノスより)

2 活動を停止した事業の骨(都市の王より)

3 昼間は口をきかないうち捨てられた者たち(プラグダロスより)

4 すっかり忘れられたもの(潮が満ちては引く場所であり)

5 潮に遠く運ばれることもなく漂うだけのもの(同上)

6 役に立たなくなったもの(同上)

7 誰かがなくしたもの(同上)

8 人間の耳には聞こえた例のない音(ヤン川より)

以下いくらかでも見つかるはずである。ただしよく見ないと注意書きを見落としてしまうことだろう。

そこにはこう書かれている。

「地上の世界の音が聞こえると彼の頭は信頼できなくなるのだ」(九死に一生より)

■水素原子の末裔

世界に不足しているものは水や火や金ではなかった。世界には知性と想像力が圧倒的に不足している。美しいものが足りなかった。

都市の華やかなものよりも都市の片隅のよどんだもの、あるいは常に接客している「時」や常に顔を合わせている「空」といったものの中にこの世に使わされた驚くべきものを感じていた。

一見きらびやかに見えるダンセイニ卿お得意の都市も、既製品である物質の声なき声「物

質の影」を新たに組み合わせで創られている。

世界にはまだ美しきものが必要だと痛感していたに違いない。それは「驚異」というオプシオンを付属してダウンロードされる。

どんな素晴らしい詩人をもってしても神秘としかいいようのないもの。科学では永遠に掴むことのできないもの。人間にその地位を教えるようないっさいの摩訶不思議。ふだんの生活では覆い尽くし誤魔化しきれないいっさいのこと。

これが卿の「新しい世界」のプロパティであった。

水素は宇宙でもっともポピュラーな存在であり、常にリンクすることを夢見ている。そして妖精のように軽い。

ダンセイニ卿を宇宙基準で表せばきつと星々は次のように述べるだろう。

「彼は美しいものを見せることによって地球を覚醒させようとしていた……………」

そして金属崇拜の盛んな人間の中であくまで水素のように振る舞った……………」

● 大空が……………話しかけてきた。「さようなら。何もかもうまくいきますからね。

さようなら」(黄昏の光のなかで)

● われわれがみな殺されても、歌はまた戻ってくるということになる。(驚異の物語・序文)

● ヨーロッパの文明はほとんど死にかけているようで、その傷だらけの地には死の他には何も育たないようにも見えるが、それでもこれはほんのひとときだけのものであって、夢がふたたび戻ってきて昔のように花開くのだろう。これほどひどく掘り返されてしまったからこそ、尚のこと光り輝くだろう。(同上)

● ともに来たれ。わたしたちの知る世界の何もかもにうんざりしている者よ。ここに数々の新しい世界があるのだから。(同上)

■都市の最終形態

都市は発狂するのかそれとも？

ダンセイニ卿の「アンデルスプラッツの狂気」における都市の分類わけは次のようになる。

【前提】都市には雰囲気が必要要素

1 幸福な都市

2 喜びに満ちあふれる都市

3 憂鬱に沈む都市

4 天をむく都市

5 大地をむく都市

6 過去をむく都市

7 未来をむく都市

8 人に挨拶をする都市

9 人を振り返らない都市

10 無視する都市

11 近隣の都市を愛する都市

12 荒れ地や野を愛する都市

13 吹きさらしの都市

14 紫の外套をまとった都市

15 茶色の外套をまとった都市

16 白づくめの都市

17 昔話を語る都市

18 幼少期を秘密にする都市

19 歌う都市

20 つぶやく都市

21 怒る都市

22 悲観する都市

そしてその上を行くのが死都。

傲慢なまでに美しい都市は征服された我が身を呪ってついに発狂してしまう。それがアンデルスプラッツ。ついに息絶えてしまった都市。魂が抜けてしまった都市。

バビロンやトロイなど名だたる都市に抱きかかえられて慰められるアンデルスプラッツの落胆するシーンは、暗く沈んだ絵画の完成に立ちあったようで感動的ですからある。

彼女の魂はどうなるのか。

通りすがりの旅人は問う「アンデルスプラッツは、なにゆえ息絶えているのでしょうか、彼女の魂はいつぬけてしまったのでしょうか？」

ここで僕はヒトツのプランがある。提案と言ってもいい。もう一つの都市があるのだ。ダンセイニ型とは違っているが紛れもなくここにも「あまりにも素晴らしすぎてついに現実にはなり得ていない都市」がある。

建築家と呼ばれることを拒んだ地上初の建築家、がいた。1932年ダイマクシオンハウスと命名した彼の築いた建築は、次のように批評された。

1 樹木のような設計

2 機械時代の人々のために提案された樹木のように建てられた空気式の家

3 我々の時代の押しボタン式の家

4 空中での家庭生活

5 引っ越しても運べる家

6 船のように建てられた未来の家

7 そのとき我々は円の中に住み、メリーゴーランドで食事をする

8 住むための機械(革命的な家)

9 支柱からぶら下がる家

それは見たことのない人に説明するならば、「地球ごま」のようなスタイルの建物だった。常識的な柱はなくあたかも空中からつり下げられたように緊張する金属線によって建物は起立している。しかも噴水のように軽やかで明るく、我々を束縛してきた「習慣」や「知識」から解放するための低価格大量生産を目的とする生活器だったのである。

そしてそれが決して気まぐれでない証拠に最後の最後に「驚異の都市」を発表する。――朝がた霧のかかった谷間に太陽が昇ると、その都市はゆっくりと姿を現す。

巨大でいながら軽く

うすいけれども力強く

光りに満ちあふれたその姿を現す。

丸くシャボン玉のような都市は

地上を離れ雲のように地球のまわりを漂い、夜ともなれば高層ビルや山の頂に停泊する――

二十世紀もつとも誤解された建築家バックミンスター・フラーは、最終的に浮かぶ構造物にたどり着き、「浮遊都市クラウド9」を構想した。

まるで神々の茶室であるかのように。

アンデルスプラッツがついにたどり着く失われた都市の楽園であるかのように。

ついに都市は魂とともに「浮遊する」ことになった。

物質は重さを空に返してついに浮かび上がるのだった。

● 素晴らしすぎて現実にはなり得なかった都市(驚異の物語・序文)

● 夢見る世界は美しきかな 宵の明星の光が差し込む

その薄青き大洋の微光 火星の黄褐色の砂漠が照り栄える(書簡集)

※クラウド9はNASAのアドバイザーであったフラーが宇宙ステーション研究の一環として1962年に考案した。直径800メートル、住民1000人の規格。

■ 見えない詩人に見えるもの

バックミンスター・フラーは「詩人」を次のように定義し期待する。

「パトロンの方から行動を起こすことを期待し、パトロンが他者と自己との統合作用の可能性を信用してくれることをけっして待ち望んだりしない、自律的で統合能力をもった芸術家」探求者、アカデミックな世界に属さない科学者、哲学者、そして機械工にして経済学者、つまり《詩人》だけがいま、概念を主導する。人類が、宇宙の漸新的変化において複雑なパターンが織りなす幸運な複合体の機能として存続するかどうかは、芸術家、科学者が概念デザインという責務への力強い自発性を復活させ……」

現象宇宙の優位性を撤廃し、ビッグバン宇宙の背景輻射を背景複写として感受し鑑賞し感嘆し共感し共振する者を、「時」は《詩人》と呼ばれるように少数者の運命を与えた。

フラーが生涯あこがれた詩人エマソンは次の言葉を残している。

―詩人は彼方までとどく聡明な認識力によって象徴にある種の活力を帯びさせ、……世界をガラスばりに変え、万物を、連続して行進していく姿のままにわれわれに示してくれる。(エマソン論文集・詩人より)

また想像力に関してもこの詩人は額に入れて長く飾っていたくなるような言葉を残してくれている。

―「想像力」と呼ばれるものによっておのれ自身を表現するこの洞察力は、まことに高級な視力であって、努力すれば身につくものではなく、……形態を通して発散される神聖な靈気に詩人がわが身をゆだね、それに随行していくことだ。(同上)

フラ―自身は《詩でつくった宇宙模型》ともいふべき「thinkionary 全宇宙のための思考言語」という態度を鮮明にし、人々が悪文と陰口をたたく中で、重要な開発をするたびに図面や数式では表現しきれないことを、より矛盾のないようより純粋に光り輝くように、《詩》を使い磨き上げて再びそのソースを浮かび上がらせた。

言語はあらゆる種族の原初において、宇宙を感じ考え踊り、宇宙に自分を映すための《鏡》であった。その設計思想ゆえに言語は生活作業用語ではなく、一人の王のための道具でもなかった。

このため本来の「言葉使いたち」はもっとも政治から遠いところで言葉をふるわせ、虚空相手に深山や野原で歌を歌い上げてきた歴史がある。

科学評論家や原子物理学者たちの遠く及ばない理由で、フラ―は実に《詩人》であった。そしてそこには高級な視力があれば、「幻想文学論」の下地がすでに見えていた。なぜならそれは見事なまでの宇宙認識だったから。

―《現実 reality》または《現実的な富 real wealth》における《リアル real》という言葉は、《王立 royal》または《王権 royalty》を意味するスペイン語に由来する。王または女王が個人的に承認したことが真実だった。リアルとは、社会経済の権力機構が現実(real)だと定めたものである。リアルとは、抽象的な法律上の存在である企業のような、法が認めた虚構である。不動産王リアル・エステートは王の地所ロイヤル・エステートと同義である。

(フラ―・宇宙エコロジーより)

フラ―に登場していなかったのは、妖精だけだった。その代わりに「飛行機のような自動車」や「百万人を収容するピラミッドのような海上に浮かぶ四面体都市」がフラ―のファンタジーを代弁していった。

充分に知っていた。見せかけだけの世界を。それにもかかわらず、宇宙に着手しようとする者たちを我々は「貴族の印」と見なし、さらに詩人ならばまず第一に「ダンセイニ」を思い出し、それは時を渡ってかたちを変えて受け継がれていく。

● わたしは大いなる虚無の中に青い空を見上げながら取り残された。(黄昏の光のなかで)
● 詩人であることは一体何なのか。それは世界の栄光を一瞥で理解することであり、美をすべての形式で理解し、その顕現を受け止めることである。(詩人クラブでのスピーチより)

● 《直観》はしばしば、夢を証明可能な現実に変える。(フラー・美と直観より)

● ぼくたちが使うのは全宇宙のための思考言語(thinkionary)だ。(フラー・テトラスクロール・ユア・プライベート・スカイ版より)

■ A ⇔ C

全体のふるまいを決して予想することもできないという作用によって、我々はダンセイニ卿がもうひとつの可能性の翼を用意してしてくれたことを喜ぶことができる。

1 聖なる場所

フラーの大叔母マーガレット・フラーと詩人エマソンが「超絶主義」を宣言し母体となった場所ボストンは、なんとダンセイニが広大なアメリカで文学講座に指定した場所だった。

その土地の霊性とフラーの関係を、ユア・プライベート・スカイでは次のように述べている。

「それ自身がひとつの州ではないにもかかわらず、アメリカの自己像の中心であるもの、ニューイングランド。北東部の湾岸地域だ。イギリスからピューリタン移民たちが定住した場所。そこにはヨーロッパが今なおはつきり感じられるが、明らかにそれは海の向こう側、過去の一部でもある。ニューイングランド、そこではアメリカがみずからを意識し、新たなものが古いものにとって代われ意識的に取り替えられるか、あるいは意識的に拒否される。バックミンスター・フラーは名家の息子であり、自分がマサチューセッツ州コンコードの超絶主義者による行動の進取的な継承者であると考えていた。コンコードでは、彼の大叔母にあたるマーガレット・フラー＝オッソリーが、エマソンとソローの傍らで重要な役割を果たしていた。」

かつて明治政府や数寄者(茶道愛好家＝骨董愛好家＝実業家)と対立し日本から亡命した美術指導者岡倉天心が支援を求めた先も「ボストン」、「ハーバード大学」だったことも土地柄を示している。

2 共通中継者

アーサー・C・クラークはダンセイニと往復書簡を交わした。

そのクラークはなんとフラーとも書簡を交わしていた。詳しい内容は不明だが、フラーの膨大な詳細日記クロノファイルの中に埋もれている。

アメリカのSFは未来オブジェのイメージだけでなく「知性の束縛と解放そして偽証された現実」という哲学イメージにおいても、バックミンスター・フラーに大きく影響されている。それはSF文壇のチェアマンであったクラークがフラーに接近しようとしていたことに、関係があるのかも知れない。

エマソンは「変貌」と見、フラーは「双補的デザイン」と見立てた宇宙全方位の詩学の神髄は、ロード・ダンセイニ卿の「美をすべての形式で理解し再現するペン」にかかれば、

それはこのように解き明かされる。

「交通の音で語られることもあれば、教会の音で語られることもあり、喇叭で語られることもあったが、なかならず赤い戦いの声で語られた。」

それはまぎれもなく地上で最も優美で最も繊細な今は滅んでしまっておそらく夢の中でしか逢えなくなっている都市アンデルスプラッツの魂の《直訳の秘伝》であった。

つまりA⇔Cをほぐすならば、ダンセイニを理解しようとするれば、バックミンスター・フラーの浮かぶ都市の原理を学んだ方が良いということでもあるだろうし、フラーの美と直観の幾何学を知ろうとするならば、ペガーナの神々や夢見る人の物語に美しい溜息を残す必要があるだろうという話である。

【参考資料】

「ダンセイニ」1878～1957年

世界の果ての物語、夢見る人の物語(河出文庫・中野善夫訳、〈自伝〉陽光の煌めきと影(ペガーナロスト誌・稲垣博訳)。そしてダンセイニ書簡集も稲垣博さんに訳していただきました。

「エマソン」1803～1882年

エマソン論文集(岩波文庫)。

「バックミンスター・フラー」1895～1983年

ユア・プライベート・スカイ(2001年フラー展カタログ)。

宇宙エコロジー(フラー+梶川泰司共著・美術出版社※ノンクレジットだが80パーセントはカミヤが編集)



※ この原稿はダンセイニ研究誌「ペガーナロスト」に発表されました

PEGANA LOST

ダンセイニ研究誌

December 2004/vol.10

http://www.013.upp.so-net.ne.jp/home_91/